



悔みみくも月の柳さる若分

石井常在門と聞へし生得芳藝ふりてりマモクキ
 妙音小心を炭一辛気真紅のまぶさ人其功終小鮮
 器量變手てせや用取れ式を同輩の士是を妬て田舎
 堅氣の石井を先を廓小連とゆた耻めん其企を

奴僕より主人常在門へ内通せしより
 直小曲輪へ奔走りて名や高尾小
 初會の約束合ひ口もとれ香合
 を逢夜のあるりと持帰り

無程湯會の席上して石井が
 高尾と名させしを目引き
 白毛を讀るや全盛
 高尾何ゆふる爰來る

此事ゆんとおざりり
 笑ふ仇恋が真ごとくありし石井が望
 エカ一事も横道の先へりて待伏 常在門が歸る
 さを切てくるを曲若とうへりて刀の錯とまきれて愚ある

信長
 信重

信長

ホリ丸一

ふか是我汚者
 後小信臣の義我心の
 裏あそ浅間

石井常在門

花陣入述

讀書
 怨思
 讀坊講釋